

原油価格とトレードパターン

コモディティ価格全般の下落基調の中でイランの核協議の合意もあり、原油価格が軟調に推移している。原油価格が下落基調の時にどんなトレードが有効かは昨年の例が顕著に示している。

昨年は原油価格下落の年だった。原油価格（ブレント）は110ドルあたりから50ドル割れ水準まで下落した。

原油価格の下落は米国経済にプラスと言うことで米国株が買われ、ドルが上昇した。米国の貿易収支の改善にも寄与した。

当然のことながら原油輸出国の通貨売り、原油輸入国通貨買いが成功した。ルーブル、オージー、カナダドル、ノルウェークローネ売りドル買い、あるいはインドルピー買いなどだ。もっとも新興国で経常収支の赤字国はドル金利上昇の影響を強く受けるので、その要因で相殺される局面もあった。トルコリラやインドネシアルピアなどだ。

個別株では運輸関係の銘柄などが特に恩恵を被るなど影響は広範にわたった。

今年の原油価格は1月中旬をボトム（45ドル）に、戻り基調を強めたが5月をピーク（70ドル近く）に再び下落基調を辿っている。

OPECの価格よりも生産維持の方針に変化はなく、価格下落による米国のシェールオイル/ガスの生産の落ち込みも限定的であり、世界景気もIMFの下方修正に見られるように回復力が弱い見通しであることから原油価格が大きく戻す可能性は小さい。むしろ一段と下がるリスクに備える必要がある。

今年前半に昨年のトレードのポジション調整が進んだと見られるので、昨年のトレードパターンが復活する局面が度々見られても不思議ではないだろう。